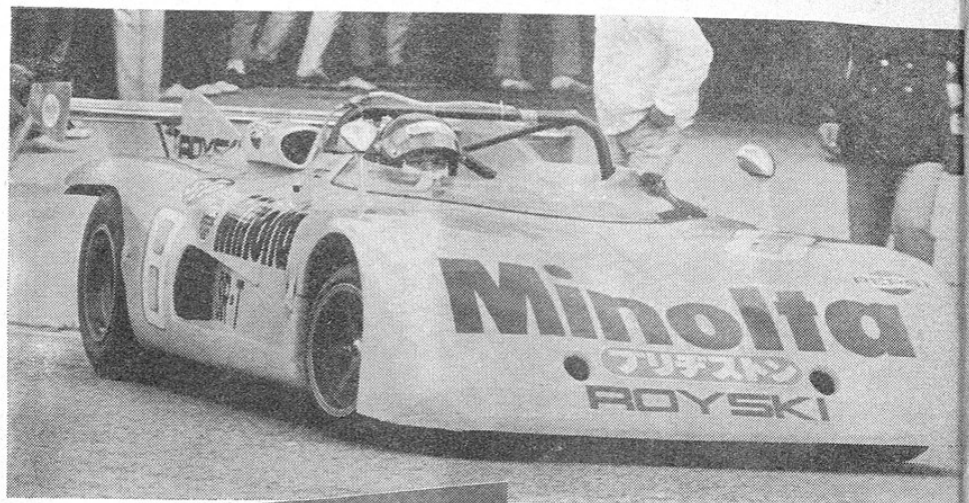
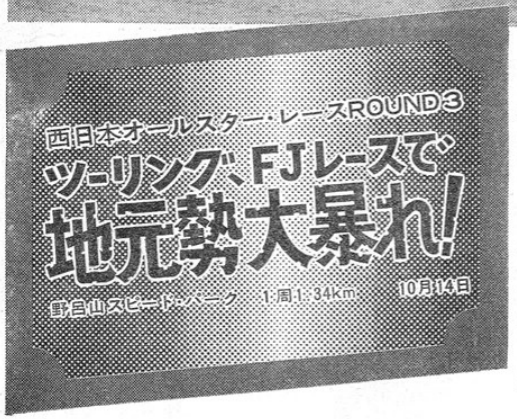




西日本オールスター・レースも3戦めを迎え、厚保サーキットから野呂山スピード・パークに舞台を移して行なわれた。初めて野呂山に2ℓ・GC マシンが登場するとあって地元広島はもとより、近県をはじめ、四国、九州からもドッと観客が押し寄せた。しかしいざそのフタを開けてみると……。

押し寄せた（？）GCマシンはたった3台

前日の10月13日は、滝のように降りつづく雨で、高低差の激しい野呂山のコースは川と化してしまった。おまけに約800m以上もある山の頂上に位置するとあって、雲とも霧ともつかない気体が一面をおおい、有効視界はわずか10mたらず。練習に乗り込んだ地元組も遠来組もまったく走れずお手あげの状態だ。

富士GCに出場している2ℓスポーツカーを大挙呼びよせて開催しようともくろんでいた主催者も、この雨には完全に予定を狂わされてしまい、その可能性は望み薄。翌日のレースもこの雨で流れるのでは——と心配事はつのるいっぽう。しかしたとえ雨が降らなくても、GCマシンの出場は90%不可能だったろう。わずか4日前の10月10日に富士で第4戦を終えたばかりではあるし、残り1戦を残してポイントを争う秘蔵っ子マシンたちを、もしも遠方の地で壊すようなことがあればと考えるオーナーの気持ちが、秘蔵っ子マシンを持ち出しにストップをかけたと思われる。

いずれにせよ時間的な問題で、2ℓ・GCマシンの招待は主催の広島平和クラブ（HPC）の手ちがいだったようだ。同じ主催者によって開かれた西日本オールスター・レース第1戦（4月1日・厚保サーキット）でも、GCマシンは招待されたが、その時はお互いに余裕のある時間を持っていただけに成功に終わった。こうして一度成功したという実績を持つ主催者がなぜGC終了後4日めという日を選んだか（それとも前からスケジュールに組まれていた日のレースに、GCマシン招へいを組み込んだのか）知るよしもないが、この開催日は適当なものではなかった。

サイン攻めにあって汗だくの酒井選手（上）とオールスター・ラインアップ!?

Mクラス優勝の青木健一郎（74フロンテ・クーペ）。

しかし大強行軍を敢行して野呂山にやって来たチームも2、3あった。酒井レーシング、フシダ・レーサーズ、ジロー・モーター・レーシングがそれ。彼らはそれぞれのトランスポーターにマシンを積み込み、富士4戦終了と同時にフェリーではるばるやって来た。翌日、激しい雨のなかを広島に着いた彼らは、道程にして約4kmはあろうかと思われる野呂山頂上への道を黙もくと登った。

吹きすさぶ風と降りしきる雨で、まるで真冬のようななかを、『なんだ坂、こんな坂……』と登りつめて野呂山頂上へ。そこでやっと宿の国民宿舎・野呂高原ロッジにたどり着く。読者諸君もすでにご存知だろうが、この野呂山は中腹以上が国立公園になっており、その一画にサーキットがある。そのため宿泊施設、その他の設備は十分に整っており、環境は抜群に良い。その夜も野呂高原ロッジは、レース関係者で満員の盛況ぶりだった。このロッジに宿をとった遠来組は東京からのGCプライベート・チームばかりではなく、九州、四国、関西からのアマチュア・チームもわんさと押し寄せ、野呂山頂はモータースポーツ一色に塗りつぶされた感じだった。

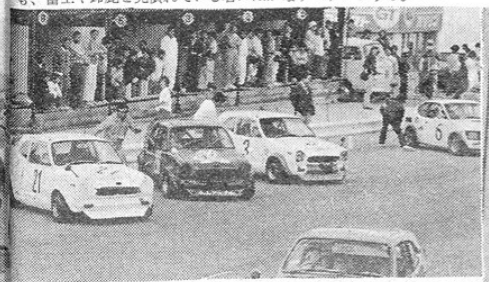
大忙し、横山競技長

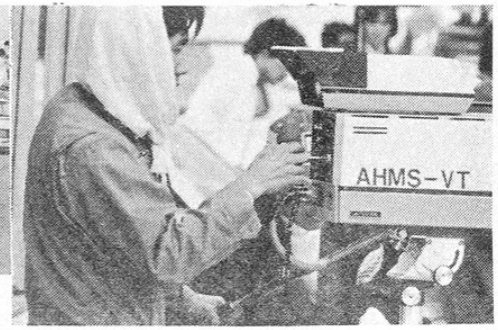
13日深夜になって雨は止み、翌14日は晴れ。といってもひじょうに変わりやすい天候で、ものすごい速度で雲が空を流れていく。風も強く、セーターにジャケットをはおってもまだ寒い。しかしパドックはカラフルなマシン（？）で埋めつくされ、コンクリートが敷かれていない山肌の土は、隠れてしまうほど。ところでこのパドックも、富士や鈴鹿を見慣れている者にはかなりビックリする。コース自体が山の傾斜にそって造られていることもあり、パドックも高低差が大きい。一番下のパドックからコースインするためには、10～15mはあろうかと思われる坂を登り、やっとこさでピット・ロードへというわけ。おまけに山肌の土は露出しており、前日の雨のせいもありグチャグチャ。第1レースのためにコースインするミニ・クラスの車は、タイヤに土がこびりついている。

だが酒井、鮒子田、米山の2ℓ・GCマシンは特別にあつらえられた（？）屋根つきガレージに居を構えている。超ワイドなタイヤ、あくまで低い車高のため、他の競技車と同じパドックでは腹をこすってしまうという配慮からだろう。ちょうど、このガレージがグランド・スタンド側にあり、初めて2ℓ・GCマシンを目のあたりに見る観客たちが、ガレージのまわりに黒山の人だかりを作った。

ところが、である。10月10日の富士GC終了後そのままの状態で野呂山に運び込んだマシンは、どう見ても最高潮に保たれているとはいえない。メカニックが必死で整備にとりかかるのだが、なかなか手こずりそうだ。なかでも米山二郎のシェブロンB21は完全にお手あげ。富士GCでもEAエンジンのパーツがないということで出走を取り止めにしていたのに、それを野呂山に持ってきたのだからたまらない。やれパーツがない、やれバッテリーの容量不足だと理由を並べても走らないマシンは走らないのだ。

鮒子田のシェブロンB21Pも快調とはいえなかった。富士で痛めたクラッチを修理する間もなく、ここ野呂山に持ち込んだのだから無理もないが、いざ走る段になると苦戦（？）はまぬがれそうにない。ただ1台酒井正のマーチBMW735だけが、スタンバイの状態





同じくMクラスのル・マン式スタート（上）。地元放送局もテレビ撮影で大はりきり（右）。